

# 専門学校教員養成における協調自律学習の事例的検討

河井 正隆  
 明治東洋医学院専門学校

## 1. はじめに

学生における最高の教育環境は、教育の担い手である教員自身と考える。近年、その教員の養成に関して、教員養成系大学・学部などでは、複雑で多様な教育問題を「主体的に知識を創造しながら問題解決に取り組むことができる」(西之園 2003)人材の養成が求められている。これは初等中等教育の教員養成に関する論議ではあるが、専門学校教員の養成においても同様であろう。初等中等教育での教員養成における研究は膨大な蓄積があるものの、専門学校教員の養成に関する検討は数少ない。今後、専門学校教育を充実・発展させゆくためにも、専門学校教員の養成に特化した実践的研究が急務と思われる。

ここで、専門学校の特徴の一つを見てみたい。専門学校では高卒者の進学率(平成 18 年度)が大学(41.8%)の次に高い(18.2%)ばかりでなく、入学する学生の多様性にも注目する必要がある。つまり、職業教育としての専門学校教育を担う教員は、実にさまざまな学生を相手に、日常の教育実践に取り組むことになる。そのためにも、専門学校としての教員養成についての議論を、初等中等教育と同様、今後活発に行う必要があると思われる。ましてや、教員養成の実践的研究の蓄積は今後ますます重要性を帯びるものと思われる。

そこで本研究では、専門学校教員の養成に特化した本校教員養成学科「教育学概論」を題材に、本授業の有用性を論及する。具体的には、「本授業のねらい」(後述)に則し、C-Learning<(株)ネットマン>を活用した協調自律学習(西之園ら 2006)を導入し、本学習方法の有用性の検討を目的とする。

## 2. 今回の授業実践について

### 2.1. 授業の概要

今回対象とした授業は、本校教員養成学科に開設する必修科目「教育学概論」(2007 年度前期)である。受講生は 12 名(男性 7 名, 女性 5 名)で平均年齢は  $30.9 \pm 6.5$  歳である。以下、授業の概要を述べる。

授業のねらい: 協調自律学習を通し、自らが主体的に知識を創造し問題解決に取り組む技術、態度を養う。

最終の課題: 「私が構想する未来の専門学校」(レポート 3~10 枚, 3,600 字~12,000 字)

授業回数: 前期 12 回(平成 19 年 4 月~7 月), 1 コマ 90 分。授業の流れを表 1 に示す。

授業形態: 50 分程度の授業者からのショートレクチャーを含め、1 チーム学生 4 名(合計 3 チーム)の協調学習と、個人ベースで行う自律学習の両者を交互に組合せ、授業内外で学習を進める(図 1・2)。

テキスト: 学習開発研究所発行『教育の技術と方法 - チームによる問題解決のための学習テキスト -』(2006, 初版)を本授業用に改変し使用。

2.1. 「C-Learning」システム（株式会社ネットマン）の導入について

今回の授業において、以下の点を期待し本システムを導入した(PC または携帯電話の活用)。

授業に関する情報の発信：教員から必要な情報を学生に配信。

授業に関する情報の交換：専用サイト掲示板で学生同士の情報交換。

授業に対する意見・質問：専用サイト掲示板で授業への意見・質問の書き込みを可能に。

レポート・課題の提出：Web 上からレポート・課題の提出を可能に。

学生が作成した資料の共有化：専用サイトにアップロードやダウンロードを行わせ、資料の共有化を実現。

表 1 授業の流れ

3 . 本授業のイメージと協調学習と自律学習の関係性

本授業のイメージを図 1 に示す。そのイメージ図は、授業における協調自律学習の展開を表現したものである。簡潔に説明すると、教室空間では主にチームによる協調学習が、併せて個人レベルで行う教室内外の自律学習との組合せで、最終の課題を目指し学習が進められる。さらに本授業では、チーム間での競い合いを通し、新しい知識の創造を期待する(ここではその関係性を“競創関係”と呼ぶ)。

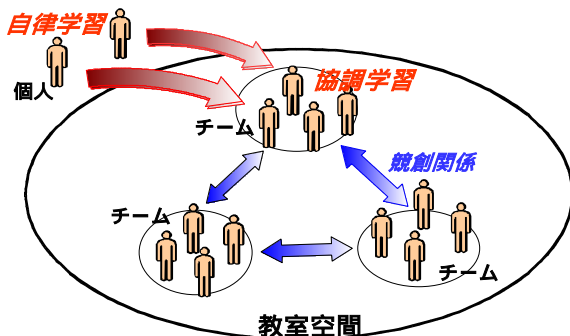


図 1 授業のイメージ

回数	協調学習	自律学習	ショートレクチャー (約50分)
1	ガイダンス		オリエンテーション
2	チームメンバーを良く知ろう!	私のプロフィール、イメージ調査、チーム実践力の習得目標の3つを記載	学校の歴史(1)
3	ショートディベート: チーム力を知ろう!	ショートディベートの準備 (テーマ: 教員中心主義 VS 学習者中心主義)	学校の歴史(2)
4	構想する将来の専門学校	解決しなければならない専門学校の課題をまとめる	"教育"をめぐる諸問題
5	チーム発表の準備(その1)	チーム発表用資料の準備	専門学校を取り巻く諸相
6	チーム発表の準備(その2)	チーム発表用資料の準備	現代学生 "気質"
7	チーム発表 ; 学校見学会の実施, チーム学習を評価しよう!	チーム発表用資料の準備	
8	ショートレポート作成	ショートレポートの準備	
9	ショートレポートから学ぼう	ショートレポートの熟読	学力問題を考える
10	参考文献を読み合おう!	指定参考文献の熟読	カリキュラムを考える
11	最終レポートの資料集め	最終レポートの準備	学習方法を考える
12	最終レポートアウトライン作成, 学習のまとめ	最終レポートの準備	新しい教育ツール
		最終レポートの作成・提出	

また、本授業における協調学習と自律学習の関連性を図 2 に示す。前述のように、学生にある程度の知識を習得させるために 50 分程度のショートレクチャーを授業者が行う。その後、適宜チームによる協調学習と個人ベースの自律学習の両者を螺旋的に行わせ、学生自らが主体的に知識を創造し問題解決に取り組む学び(態度・技術)を実現しようとするものである。

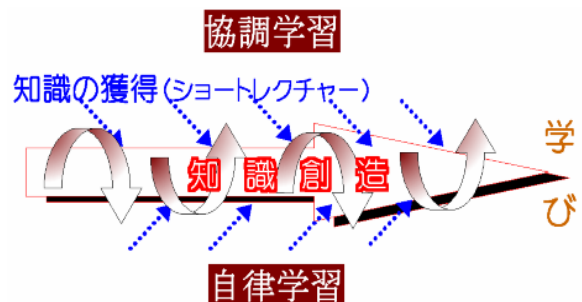


図 2 協調学習と自律学習の関連

#### 4. 本学習方法の有用性の検討 - 学生授業評価から -

12回の授業が終了した時点で学生による授業評価を実施し、得られた授業評価の結果から、今回のC-Learningを活用した協調自律学習の有用性を検討した。各設問は表2に示す通りであるが、設問中の「今まで以上に～」という問いでは、学生自身の今までの学習経験（受けた授業）を回想し、今回の授業との比較を通し回答を行わせた。回答はすべての設問で「そう思う」・「まあそう思う」・「どちらともいえない」・「あまりそう思わない」・「そう思わない」の5件法で求めた。その結果、授業評価は12名すべての学生から回答を得た（表中のQ1のみ不明が1名存在）。なお表中の網掛け部分は、「そう思う」と「まあそう思う」とを合わせた肯定的な回答者数が半数以上の項目を示している。

以下、3つの枠組みで本授業における学習方法の有用性を検討してみたい。なお、示す学生数は「そう思う」と「まあそう思う」とを合わせた肯定的学生数である。

**表2 学生授業評価の結果**

	そう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
Q1 この学習方法になじんだ(親しみ)	0	3	5	1	2
Q2 この学習方法は"学習のねらい"を達成するのに役だった(有用性)	0	6	2	3	1
Q3 今まで以上に、自分なりの新たな知識を生むことができた(創造性)	0	5	4	2	1
Q4 今まで以上に興味深く学ぶことができた(興味)	0	4	5	2	1
Q5 今まで以上に授業に関心が持てた(関心)	0	6	4	1	1
Q6 今まで以上に積極的に授業に参加した(意欲)	1	4	4	2	1
Q7 今まで以上に満足する授業であった(満足)	0	5	4	2	1
Q8 今まで以上に授業内容/課題を理解できた(理解度)	5	3	3	0	1
Q9 今まで以上に効率よく学べた(効率化)	0	5	5	1	1
Q10 今まで以上に問題解決へ取り組む技術が身についた(問題解決-技術)	0	5	5	1	1
Q11 今まで以上に問題解決へ取り組む姿勢が身についた(問題解決-態度)	0	7	3	1	1
Q12 今まで以上に主体的に学べた(主体性)	2	7	1	2	0
Q13 今まで以上に学生同士、授業に関するコミュニケーションをとることができた(コミュニケーション)	2	9	1	0	0
Q14 協調学習(チーム学習)は機能した/うまくいった(協調学習)	2	9	1	0	0
Q15 チーム内の役割は理解できた(チーム役割)	3	5	4	0	0
Q16 チーム内の役割は機能していた(チーム機能)	3	4	5	0	0
Q17 他のチームに負けないうチームが結束し課題に対して頑張った(競創関係)	5	2	4	0	1
Q18 自律学習(個人学習)は機能した/うまくいった(自律学習)	1	3	5	2	1
Q19 この学びにC-Learningは役だった(C-Learningの有用性)	1	2	4	3	2
Q20 今まで以上に楽しく学べた(楽しさ)	1	4	4	2	1
Q21 ショートレクチャーは新しい知識の獲得に有益だった(知識獲得)	2	4	2	3	1

(人)

#### 4.1. 「授業のねらい」に対して

前述した本授業のねらいに対し、この学習方法はそのねらいを達成するのに有用かどうかを検討する。その結果、有用とする学生は6名であった(Q2)。また、今まで以上に自分なりの新たな知識を生むことができたとする学生は5名(Q3)、また、協調自律学習を通して得られて問題解決への技術・態度面の定着度は、技術面では5名(Q10)、態度面では7名(Q11)がそれぞれ身についたと回答する。さらに、主体的に学ぶことができたとする学生は9名(Q12)、と多い。

このことから、今回の協調自律学習の全体を振り返ると、概ね学生はその有用性を感じつつ主体的に学ぶ姿勢(問題解決における姿勢)が養われた、と評価していることがわかる。その支えの一つが、コミュニケーションの活性化が挙げられよう(Q13)。ただし、新たな知識の創造や問題解決場面における技術面への育成については、その限りではない。

#### 4.2. 協調学習と自律学習について

次に、協調自律学習を協調学習と自律学習とに分けて検討する。

今回の授業で協調学習が機能したと感じる学生は11名(Q14)と殆どの学生が肯定的である。また、協調学習におけるチーム内の役割についても概ね肯定的な評価であり(Q15・16)、チームが結束し課題に対し頑張るという競創関係(Q17)が生まれたとする学生も、全員ではないものの半数以上いることがわかる。

それに反して、自律学習が機能したとする学生は3名と少ない(Q18)。この点を解釈するため、自律学習(Q18)と他の設問項目とのクロス集計で検討を行った。その結果、学生全体では学生間のコミュニケーション(Q13)やチーム学習の有用性(Q14・15・16)を否定しないものの、自律学習がうまく機能しなかったとする学生では、C-Learning(Q19)の活用という学習形態や協調自律学習への親しみ(Q1)という点が、自律学習の機能を低下させる要因として浮かび上がった。つまり、学生が感じる学習方法そのものへの違和感が自律学習の機能を低める傾向にあるといえる。

以上を踏まえ、チーム学習としての協調学習は概ねその機能は果たされたものの、学生個々の状況が反映されるなか、自律学習の機能が低下する傾向にある、といえよう。

#### 4.3. 興味・関心・意欲、そして満足

最後に、協調自律学習を取り入れた今回の授業への興味・関心・意欲そして満足について検討する。

今回の授業に関して、興味・関心・意欲、そして満足の度合いは、授業評価から全体的にみるとさほど高い評価を得られたとはいえない。それぞれの評価を個々でみると、授業への関心については、6名の学生が関心を持てたとするが(Q5)、興味や意欲、満足のそれぞれ肯定的回答数は半数を下回り、高い評価を得ることができなかった(Q4・6・7)。これらはいずれも授業者自身の問題であり、今後の課題としたい。

## 5. まとめと今後の課題

今回、専門学校教員の養成に対してC-Learningを活用した協調自律学習を導入し、その有用性の検討を行った。その結果、授業のねらいに対する本学習方法は、全体として概ねその有用性をもつことが示唆された。しかしもう少し踏み込むと、協調学習においては機能性が高く自律学習については低いことが示された。

ここで、今回の授業実践を省察しつつ問題点を5つにまとめ、併せて今後の課題を述べてみたい。

第1に、学習者の人数の問題である。西之園（2003）や長尾ら（2006）の実践では、協調自律学習を多人数で実施している。しかし本授業では12名と少人数での実践となっている。授業評価からC-Learningの有用性に対し否定的な学生が多いことが見て取れたが（Q19）、ここに少人数の影響をうかがうことができる。つまり、教員養成学科の学生12名は毎日他の授業で顔を合わせるという学習環境からしてみれば、C-Learningの活用の必然性が低く、合って意見の交換や議論が可能ということである。換言すると、C-Learningを活用せずとも協調自律学習は成立するともいえよう。しかし、先に述べた通り、自律学習にその影響が顕著であり、今後、個人ベースの学習を支援する、またはC-Learningの活用がより深い学習の成立を可能にするなどといった、学生への説明方法とともにその方策が課題として浮かび上がる。

第2に、新しい学習形態（協調自律学習）を学生は受け入れるか否かの問題である。協調自律学習は学生の主体的学習を前面に置く形態であり、本校では皆無の学習形態である。その点を学生が受け入れない限り、授業は成立しないことになる。専門学校では教育の目標が職業人育成であり、そのため国家試験合格が最大の目的とされる。そこでは、国家試験合格レベルの必要な知識の獲得が学生に求められ、教員もその知識の注入を如何に行うか、が期待され教育が行われることになる。教員養成学科学生は、まさにその教育に慣れ親しみ今まで過ごし、今この授業の中にいるのである。そこに、教員は“教える”営みを表面的には持たない協調自律学習を、学生は戸惑うことなく受け入れ、自らの学びの実践に取り入れるであろうか。授業当初、その点が大きな不安の一つであった。学生の授業評価をみると、学習方法に馴染んだとする学生が少ない（Q1）ことから、その点が端的に現れている。知識の注入に慣れ親しんでいる学生に、その呪縛から解き放つには如何にすれば可能か、悩むところである。その解決策として、一つには、今回のような僅か半期12回と短い授業期間ではなく、通年授業ほどの回数が確保できれば、その点を改善することも可能かもしれない。二つには、やはり授業開始時のオリエンテーションで、今までの学習とは根本的に異なる学習形態である旨、丁寧に説明する必要性があったのかもしれない。今後検討していきたい。

第3に、チーム編成とともにチーム内の役割の問題である。今回はチーム編成を決定するにあたり、本テキストで記載されている「私のプロフィール」（第2回授業で実施）を学生に記載させ、チームのどの役割を担いたいのかその希望を聞くと同時に、コミュニケーションタイプテストの3つの結果を総合的に勘案し、授業者の判断で学生を1チーム4名（3チーム）と振り分けた。チームの役割は「司会係」・「技術係」・「記録整理係」・「計画管理係（授業後半で、C-Learning推進係と改名）」の4つである。授業評価からは、チームの役割について概ね学生は理解しその機能を果たしたと見受けられるが（Q15・16）、授業者として気になるところは「どちらともいえない」とする約半数の学生の存在である。授業当初は、全員がそれぞれの役割を果たしその延長線上でチームが目指すところの学習課題を全員がクリアするという予想を立てていた。しかし、授業記録から総合して勘案すると、チーム間でC-Learningの活用に差が生じ、最終レポート作成で同じチームの学生でバラツキが生じる、といった問題が生じた。チーム編成とともにチームの役割を再考することが今後の課題であろう。改善策として、例えばチーム編成を固定化せず、途中でチーム編成を変更するトレード制度の導入などで、チームメンバーの入れ替えを行iriフレッシュさせることも一案かもしれない。今後の課題である。併せて、協調自律学習におけるC-Learning活用の必然性をどのように持たせることができるのか、その点も大きな課題である。

第4に、レポート課題の設定の問題である。今回、最終レポートとして「私が構想する未来の専門学校」（個別で提出）を課題とした。その課題をクリアするため、チームレベル（協調学習）と個人レ

ベル(自律学習)の相互作用でより良いレポートを作成するよう個人に課したものである。そこでの問題は、チームで議論した内容に学生は互いに引きずられ、個人レベルでレポートを書こうとすると、チーム内でほぼ同一の視点で記述されるという点である。あくまでもチームの力を借りて個人レベルの創造性豊かな着眼点でレポートを書くよう指示をするが、なかなかそこから学生は脱しない。授業評価からも、自分なりの新たな知識を生むことがあまりできなかった、とする学生が多くいたことからもうかがわれる(Q3)。オリエンテーションで、最終レポート課題の説明の際、チームレベルの議論を踏まえ個人レベルで新たな知見を織り交ぜるよう、学生に周知徹底することで、ある程度の改善がみられるのかもしれない。今後の課題としたい。

第5に、“授業のねらい”が適切であったかどうかの問題である。今回のように、一つに新たな知識を生み出す、という取り組みは、教員養成学科1年生の現状に即していたかどうかの問題である。これは、知識創造以前の問題も絡んでこよう。つまり、学生のほとんどは教育学に対する知識は皆無であり、また、学校図書室内の教育学関連図書など学習教材の不足等、さまざまな問題点が考えられる。今後は、ショートレクチャーの内容・構成の再検討とともに、教育学関連の図書室内の図書の充実やC-Learning上に掲載する教材の充実も図る必要があるだろう。また、問題解決への技術面の向上については、今回、KJ法で行う作業を2回行ったが(第5・6回授業)、あまりその意図を理解しないまま授業が流れた感があり、今後その点をテキストの記載内容も含め検討することで、問題解決としての一つの技術的向上が図られるのかもしれない。

以上、今回の授業実践を振り返り、協調学習と自律学習がより有機的に関連し学生の学びが広く深く成立させゆくための、いくつかの課題が明らかとなった。今後も継続し検討を加えていきたい。

最後に一言。授業者自身が協調自律学習の意義をもっと深く理解することが最大の課題でもあろう。その課題をクリアーしたとき、専門学校教育にフィットした新しい協調自律学習の構築が可能ともなる。今後も授業実践を積み重ねていきたい。

## 謝 辞

本授業はNPO法人学習開発研究所(代表;西之園晴夫先生)から多大なるご支援を頂き、実施したものです。ここに深く感謝の意を表します。

## 参考文献

- 長尾尚,市川隆司,小林直行(2006)教職科目における「学習者中心のチーム学習」の実践と評価.日本教育工学会第22回全国大会講演論文集,409-410.
- 西之園晴夫(2003)知識創造科目開発における教育技術の研究手法-問題解決能力を育成する教員養成のための授業開発の事例-.日本教育工学雑誌,27(1):37-47.
- 西之園晴夫,宮田 仁,望月紫帆(2006)教育実践の研究手法としての教育技術学と組織シンボリズム.教育実践学研究,8(1):23-34.